

雲 くも

奔 はし

る

小説・雲井龍雄

藤沢周平

文春文庫



文春文庫

雲 奔 る 小説・雲井龍雄

定価はカバーに
表示してあります

1982年11月25日 第1刷

1990年2月20日 第3刷

著 者 藤沢周平

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-719204-7

文 春 文 庫

雲　　奔　　る

小説・雲井龍雄

藤 沢 周 平



目次

第一部 雲 奔 る

第二部 討 薩 ノ 檄

第三部 檻車墨河を渡る

あとがき

5

63

225

291

雲^{くも}奔^{はし}る

小説・雲井龍雄

第一部 雲奔る

一

燕が飛んでいる。燕は田に漲っている水をかすめるようにして飛び、次の瞬間白い腹をかえして空に駈けあがる。高い空で他の燕と擦れ違い、鋭い啼き声をかわすと、遠い空の中でまた反転する。

雲井龍雄は、燕を追った眼を、また田圃の一角に戻した。そこに女がひとりいる。若い女だった。女は畦を塗っている。鍬で泥を掬い上げ、丁寧に畦を塗り潰して行く。単調な動作だった。単調で辛抱のいる仕事だった。女は昨日見たとき、もっと遠い場所にいたのである。そのときは父親らしい年輩の百姓と二人だった。

郷内の定められた村々を見廻り、宿舎にしている高畠の自性院に帰ると、時刻はおおよそ七ツ時（午後四時）を過ぎている。それから夕食が出るまでの一刻、米沢藩からきている屋代郷警備の者たちは手足を伸ばして雑談したり、手紙を書いたりして過ごす。寺の女房に針箱を借りて、

器用に肌着の破れを繕ったりする者もいた。

この時刻、龍雄は大方外に出る。懷には矢立と懷紙が忍ばせてある。自性院の寺門もない境内を出ると、寺の前を南北に道が横切る。右に行けば、道は高畠の町を横切つて嚴島神社の横を抜け屋代川に出る。左に行くと左右に二、三軒の農家があるばかりで、すぐに亀岡、泉岡を経て、小郡山、金原の村々に行く道に出る。往還の向う側に田圃がひろがり、田圃の果てに高安村の家々が見えてくる。村を抱くように、背後に龍岳、文珠山、塩ノ森など大小の山が南の空を遮っている。

龍雄は往還の端に腰をおろしている。昨日は道を金原まで行き、有無川のあたりを散歩して、幾つかの詩句を得て帰つたのだが、今日は疲れていた。足が疲れているだけでなく、心の中に鬱鬱と楽しまないものが巢喰っている。

今朝龍雄は、顔を洗つて、喉に絡む痰を吐いたとき、一筋の赤い糸のような血を見た。一瞬騒ぎ立つ胸を押さえて、龍雄は注意深く喉を鳴らして二度、三度と唾を吐いたが、もう赤いものは見えなかった。

しばらく会わなかったものが、不意に顔を出したような気がした。それはちらと顔を見せただけで、すぐに姿を隠したようだったが、胸の内部に執拗に生き続けている宿痾の顔に紛れなかった。二年前に龍雄は激しい吐血を経験している。

朝みた短い糸に似た赤い血は、龍雄の胸の底にある焦燥を呼びさましていた。何事か成し遂げ

ねばならないという漠とした望みがある。望みの中には、十五の時に死歿した母の遺託もある。龍雄の母は、死の間際に、長い間胸に秘めて一度も外に洩らすことのなかった望み、罪を得て絶家となった実家屋代家の再興を龍雄に託している。屋代家の家名回復は、龍雄の望みの核となったが、望みはそれだけでない。先年自刃した恩師山田蟻堂かみどうが開いて見せた世界が、龍雄の頭腦の中に描かれている。それは貧しい藩財政のために、地にしがみつくようにして生きること余儀なくされている下級藩士の一人である龍雄には、眼が眩むような世界だった。

四囲を重ねる山々に囲まれた米沢領の外に、その世界は無限にひろがり、新しく生まれ変わるべく動いているという。血を吐くまで刻苦して修めた学問を、そこで生かすべきだった。磨いた己れをそこに投入し、何ごとかを成すべきだった。屋代家の再興は、そこでの己れの働き如何による。

その望みを抱きながら、現実には龍雄は米沢藩組外五石二人扶持の下級藩士小島龍三郎として、屋代郷警備の人数の中にいた。雲井龍雄は本名小島龍三郎、米沢袋町の中島家の次男として生まれたが、十八のとき館山口町の小島家に養子となり、小島姓を継いだ。雲井龍雄と名乗るのは慶応四年以後である。

春から初夏に変わろうとする空は、眩しいほど青かったが、その空の遙かに、龍岳、豪士山と連なる山々は、東南に聳えて視界を遮っており、胸の肉の奥には、正体のさだかでない病魔が棲みついている。

龍雄は、腰をおろしたまま、仕事を続けている女を眺めている。女は仕事をすすめながら、次第に道の方に近寄ってきて、龍雄から六、七間の距離にいた。紺紺と真新しい笠、笠の下にのぞいている赤い紐で、昨日の女だということが解った。女はほとんど顔を挙げないで、黙々と仕事を続けている。

だが女の仕事は、まだ空が明るいうちに終った。畦に上がると、疲れたふうもない足どりで農道に出、道に沿って流れている小流れで丹念に鍬を洗った。傾いた日射しが、鍬の刃先にあたつてきらりと光る。女の顔は、笠の下で白い布に包まれていてよく見えない。だが円やかな体の線や、笠の紐、紺の手甲など衣裳の新しきで、まだうら若い女のように見える。

龍雄は、ぼんやりと米沢の家に残してきた妻のヨシを思い出していた。ヨシは龍雄より二歳年上の二十三である。眼鼻立ちのはっきりした、面長の美貌だが、一度嫁ぎ、不縁になって出戻りでいたところを龍雄に嫁入ってきた。龍雄の兄中島久兵衛の嫁が、藩の御手明組丸山庄左衛門の長女で、ヨシはその妹という縁である。

龍雄は、ヨシとまだ心がしっくり通い合っていないのを感じる。嫁入ってきたのが去年の秋で、年が明けると龍雄は屋代郷警備のため家を離れている。そういう事情もあったが、ヨシには龍雄には理解できない既婚者の悪い落ちつきのようなのがあつて、龍雄を居心地悪い気分にする。ヨシの前で、龍雄は感情の動きを見透かされている気がする。事実ヨシは何かの時に、露骨に姉さま女房ふうに振舞うことがあつた。それは気性の激しい龍雄を反撥させる。だがいま、

ヨシをひどく懐かしいもののように思い出しているのは、気が弱っているせいかも知れない、と龍雄は思った。

龍雄は立ち上がった。鍬を洗い終った女が、体を起こして往還に向かって歩いてくるのを見たからである。あまりに長い間女を眺め続けたという狼狽が心の中にあった。

女がしっかりした足どりで、自分の方に向かって歩いてくるのをみると、龍雄は少し^{けお}気圧される気がした。

——この優しげな女も、やはり敵をみるように俺をみるだろうか。

龍雄は女を視ている。女は近づいてきた。道に上がると、顔を挙げてちらと龍雄をみた。澄んだ黒眸が、一瞬ひたと龍雄を見据えたようだったが、視線はすぐに逸らされた。軽い足音が、龍雄の前を通り過ぎた。

女の姿が往還から左に逸れて、樹の陰にかくれるのを見送ってから、龍雄はゆっくり自性院の方に足を向けた。鈍い苦痛が龍雄を捉えている。若い女の眼に一瞬閃いた光が、紛れもない憎悪だったことが、龍雄の心を重くしている。

屋代郷の人々が龍雄たちを眺める眼には、一片の好意もない。大方は眼を伏せて擦れ違い、眼を交わすものは、敵意を露わにした。ある日見廻りの途中に、何気なしに見上げた町筋の二階から、斬りつけるような視線が落ちてくるのにぶつかったこともある。

見廻りを終って宿所に戻ると、郷の者の敵意に体がずたずたに斬り裂かれている気がする日も

あった。

二

文久三年二月、屋代郷三万七千石を、米沢藩の私領に準じると幕府の下命があった日、米沢藩では家老以下下士に至るまで、終日酒を飲み、狂喜乱舞したと口碑は言う。

口碑は、あるいは誇張に過ぎる部分があるかも知れない。しかし当時の米沢藩士の心情からさして遠いものでなかったことも事実である。藩財政はそれほど窮迫していた。

もっとも米沢藩の財政は、はじめから窮迫していた。

慶長五年の関ヶ原の役とき、西軍に味方した上杉家は、翌六年七月に至って漸く徳川家と和睦したが、上杉景勝の所領会津百二十万石は削られ、上杉家の宰相直江兼続かねつぐの所領伊達、信夫、置賜の三郡、高三十万石だけが残された。

景勝は、戦のために雇い入れた浪人に暇を出しただけで、五千余人の譜代の家臣をそっくり伴って米沢領に移っている。実質的には、直江兼続が、自領内に主君景勝以下を引きとった形になった。

百二十万石の世帯を、三十万石の器にそのまま収容したのは異常だが、その背景には、覇権を握った徳川に対する、上杉の険しい警戒心が存在したようである。

直江兼統は、慶長九年に家康の寵臣で和睦を斡旋した本多正信の次男左兵衛正重を養子とし、のちに長女を娶らせるなど外交的な手を打つ一方、同じ年には近江国住友村から鉄炮師吉川総兵衛を、泉州堺から和泉屋孫右衛門を招き、領内の関村白布高湯で鉄炮を製造させ、年末には家中に鉄炮鍛錬の規則を発令している。移封当時、城下に仮住まいを余儀なくされていた家中藩士を収容すべき屋敷割が、移封後八年たった慶長十四年に漸く出来上がったが、出来上がった町割は、堅固な軍防の都市であった。

米沢に移封された翌年、米沢城はただちに三ノ濠を普請している。この城を中心に大手門前に家中で最も家柄の高い侍組九十六家、南には謙信以来の武勇を誇る馬廻組、西に景勝が新発田を攻めたときに武功拔群だった直参の五十騎組、北側に直江兼統直参の与板組を配し、その周辺、街道の出入口に下級藩士を配った。道は鉤の手、袋小路を用い、鉄桶で城を囲んだようであった。城下町の外にも、家中を配置している。ひとつは町自体が狹隘で、藩士すべてを収容しきれなかったためだが、ひとつは明らかに城下町の外廓に武備を配り、食糧の自給自足を兼ねさせたのである。

米沢が伊達領であった時代に、鷹場であった松川扇状地の南原、松川対岸の東原に屋敷割して、ここに下級藩士を住まわせた。これらの下級藩士たちは、初めから半士半農で、軍防の尖端に位置すると同時に、開墾に従った。後に軍事の色彩が薄れるに従って「原方の糞掘み」と言われた、原方衆の初めである。